

# 初級段階の指導と教科書

—「別科・日本語Ⅰ」を中心に—

酒井 亮子

キーワード：初級段階、中級読解、学習者、例文、構成

## 1. はじめに

長崎総合科学大学別科日本語研修課程は、日本の大学進学を目的とする外国人留学生のための準備教育機関である。1979年度に最初の修了生を送り出して以来20年間で232名の学生を日本国内に送り出してきた。本学別科は本学学部進学予定者のための予備教育を行うことを目的として設置されたが、その後私費留学生の実情に伴い日本語能力試験・私費外国人留学生統一試験への対応も考慮した教育課程に基づく指導を行うようになった。

本学では、1989年に別科の学生の実情に合わせた自主制作の初級日本語教科書『別科・日本語Ⅰ』を出版した後、1993年に改訂版を、昨年（1999年）3月に第3版（B5判、全447ページ）を出版するまでに至った。この教科書は前任者たちの経験と様々な工夫が蓄積されたもので、初級段階の日本語教科書としては本学別科修了生の満足度もかなり高いものとなり、筆者も自主制作教材の強みを実感している。

本論文では、『別科・日本語Ⅰ』の初級教科書としての特徴と本学における実際の指導上の利点を考察し、初級段階の指導をする際の教科書の果たすべき役割を考えたい。

## 2. 別科生の実態と教育課程

まず、この5年間の学生の実態と、別科の年間を通した日本語指導について述べたい。過去5年間に限るのはそれ以前と学生の傾向がやや変化したこと、および筆者が中心に関わった期間に限って振り返ってみるためである。

## 2-1 別科の現状

本学別科の定員は10名で、95年度から99年度までに中国32名、マレーシア4名、その他7名の修了者を出している。それまで大半を占めていた中国系マレーシア人留学生が減りはじめ中華人民共和国からの留学生が増え始めた。中国人留学生を中心にマレーシア、韓国、インドネシアなどアジアからの留学生が多いのが本学別科の特徴である。例年数名の非漢字圏からの留学生もいるが、漢字圏、非漢字圏を問わずまた、日本語学習の既習者も初習者も一緒に初級から単一クラスで授業を行ってきた。既習者の占める割合は年度でも多少の違いはあるが全体の20～30%程度であり授業はあくまでも初習者を中心に進めている。

年度毎に学生の個性、クラスの持っている雰囲気は異なるが、全般に本学別科生の特徴としては、以下のことがあげられる。①留学の目的意識がはっきりしており、真面目で熱心である。②彼らの授業への取り組み、日本語以外の科目の学習到達度などから判断しても社会的、科学的関心はそれほど高くなく、どちらかといえば実利的である。③（②とも関連することだが）決して一部のエリートではない。どちらかというとも母国で志望大学へ行くチャンス逃し、日本での再起をかけて留学する学生が増える傾向にある。④日本在住の親類などがいる場合が多く極端な経済的不安は少ない。⑤国立大学志向が強い。

## 2-2 教育課程・時間割・使用教材

教育課程、時間割（1999年度例）については別表「資料（1）（2）」を参照していただきたい。日本語の科目に関しては年間総実施時数は960時間前後、その他の科目が450時間前後、計約1500時間の学習時間がほぼ例年確保されている<sup>1)</sup>。そのうち約300時間を初級の学習に当てており、この段階での彼らの日本語習得の成否がその後の彼らの進路を左右すると行っても過言ではない。

年間の学習計画はおおまかに4月から7月までが初級、9月から11月はじめまで中級、2週間程度の日本語能力試験を意識した学習。12月から1月末まで上級、となっている。

以下は昨年度（1999年）の「文型」授業での使用教材とその授業時間を表にしたものである。

①『別科・日本語Ⅰ』長崎総合科学大学別科

312時間

②『中級・日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター	168時間
③『Intensive Course In Japanese Intermediate』	
対外日本語教育振興会編（絶版：全15課中7課のみ学習）	76時間
④日本語能力試験のための学習 <sup>2)</sup> ・模擬試験（プリントなど）	36時間
⑤『上級・日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター	
（第1部全10課中4課、第2部補助教材の1部のみ学習）	24時間
⑥新聞など一般紙（誌）から社説などの学習	48時間
	合計664時間

これに日本語関連科目として、文型テスト、作文、会話、漢字、発音・表記が加わる。

### 3. 『別科・日本語Ⅰ』が初級段階以降の日本語指導にもたらす効果

#### 3-1 中級段階へ移行する際の利点

日本語能力試験を意識せざるをえない状況のなかで、筆者の経験からして初級の学習が効果的に行われた場合は中級、上級への学習がうまく連動し少々無理な能力試験への対応を意識した学習も功を奏する。

特に中級教材として1994年度から使用している『中級・日本語』の学習を例にとるとこの教科書は約300時間の学習時間を考えて作成されているが、本学の場合付属教材の使用も含めて全体の学習に168時間しか費やしていない。これは昨年度に限ったことではなく、この学習速度でも学生が教材を充分理解できるからである。

その理由として、筆者は『別科・日本語Ⅰ』の構成・内容に負うところが大きいと考える。詳細な考察は別の機会に譲るとして、以下に簡単な理由を挙げる。まず「読みと作文」の効用であり、つぎに全体の構成の良さが考えられる。

##### 3-1-1 「読みと作文」の利点

『別科・日本語Ⅰ』（全38課）の特徴のひとつは各課の最後に設けられた「読みと作文」にある。これはその課の初出の文型、文法項目を中心に学生にとって身近な題材を話題にし、過去の別科生が書いた作文、スピーチの原稿などを活用し書き下ろした読解教材である。またこの教材は別枠の作文の授

業の時にも参考例として使用している。第16課の「読みと作文」(教科書は分かち書きを採用)を参考にその特性を見てみよう。

長崎総合科学大学のキャンパスにはいろいろなたてものやしせつがあります。

大学の中心は別科日本語研修課程がある3ごうかんです。6かいだての茶いろのたてもので、教室やじむ室やけんきゅう室やじっけん室などがあります。じむ室にはきょうむ課やがくせい課などがあります。きょうむ課はじゅぎょうのじかんわりや学生のせいせきなどをかんりする所です。学生課は学生しょうやいろいろなしょうがく金をもらう所です。3ごうかんにはそのほかにかいぎ室やほけんセンターもあります。

ほけんセンターは学生や大学ではたらく人たちのけんこうをかんりする所です。1年に1回ここで全員のけんこうしんだんをします。また、ビデオテープやカセットテープを使って外国語をべんきょうするLL教室もあります。

3ごうかんのうしろの山の上にはふねのもけいを使ってじっけんをする60メートルのすいそうがあります。3ごうかんからすいそうまでのさかみちのりょうがわにはいろいろな木や草花があります。とてもきれいです。また、けしきもすばらしいです。休日には近くの人たちがおおぜいさんぽにきます。

この読解文は学習開始後90時間程度で読む文だが、わずか500字あまりの文には、この課の初出文型である連体修飾節(現在形)が7例も提示されており、実際の授業でも最低5回ほどは音読し、精読する。学生はその課の重要文型を自然な流れの文の中でくりかえし復習することができる。

「初級段階に名詞句や連体修飾節が全くないわけではないが、そこでは単文を中心とした、基本的な事柄を学習させ、名詞句、連体修飾節については中級段階で、総合的に示す。初級から中級に進むと、学習するそれぞれの文が長くなり、複雑な構造をもってくる。」(北條1998)というのが日本語教育における連体修飾節の学習についての一般論である。が、『別科・日本語Ⅰ』ではこの第16課の「文型」の欄でもすでに連体修飾節と被修飾名詞との格関係など様々な観点に配慮した例文が27提示されており、「読みと作文」では

「ほけんセンターは学生やだいがくではたらく人たちのけんこうをかんりする所です。」の文に見られるように連体修飾節が2重になって構文がより複雑化した文もある。しかし学生にとって身近な話題であり、その課の要点が明確なため、抵抗なく理解できる。

参考までに『中級・日本語』の前半の読解文を見てみよう。この教科書は全21課中、第1課～第6課までが中級へのつなぎの課であり、第7課から中級段階の読解教材が始まっている。

7課の初出文型は「～と同様、～（ある）ことは～（ある）が、～は～になくはない、～ほどではない、Nをはじめ、したがって、更に、Nさえ～ば（いい）、～とともに、Nの外に（＝～以外に）、～おかげで／せいで、Vされる（Vせられる）、～につれて」の13文型で、語句は「～化、～中（じゅう）」である。本文の字数は約1600字である。

初出文型および語句を除いて、本文の構文上の特徴を見ると連体修飾節が多いことがわかる。本文では20例以上が提示されており、例えば「東南アジアのスパイスを使った辛い料理や油を使って揚げたりいためたりするものが多い中国料理」「買って持ち帰り、そのまますぐに食べられる温かい弁当を売る店」などのような複雑な構文の把握がこの課の本文の理解につながるのがある。

1600字で20数例の連体修飾節の提示は、前出の「読みと作文」の500字で7例と頻度の点では大差ないことがわかる。つまり学習時間90時間程度でも語彙の点を除けば、日常的に中級読解への準備がこの「読みと作文」を通してできるのである。

### 3-1-2 『別科・日本語Ⅰ』の構成上の利点

中級への学習を容易にしているもうひとつの理由としては、この教科書の構成上の特徴があると思われる。各課ごとの重要文型が明確であり、その文型が集中的に練習できるような構成になっているからである。またその課の文型例文の数も他教材と比較すると、格段に多い。

さきほどの連体修飾節を例にとると、第16課で現在形、第17課で過去形、次に動作の進行をあらわす「～ています／ていました」を第18課で学習し、その課で「～ている／ていた」を含む連体修飾節を提示している。つまりその課の文型はできるだけ単純化し、学生がひとつの文型を習得した後、同じ

文型を使ったより複雑で発展的な文へと、学ぶ側の意識に立った文型提示がなされているのである。

中級読解でもうひとつ学生が混乱しやすい構文に副詞的な従属節がある。これらの主なものは初級後半で学習するのだが、特に「と、ば、たら、なら」の条件を表す文に関しては、「日本語を学ぶ外国人学生を悩ませるものの一つ」であり、それは「これら四種の語がそれぞれに複雑な意味を持ちながら、それでいてなおかつ、相互に重複した意味をもっているからである。」(鈴木1990)との認識は日本語教育に関わる教師が共通に持っているものであろう。しかし、教科書の段階でこの問題を解決しようと試みている教材は少ない。これも『別科・日本語Ⅰ』では、課ごとにポイントを明確にし、まず第29課で「～たら」、第30課で「～と」、第37課で「～なら」「～ば」を集中的に学習するように構成されている。また、原因・理由を表す「から、ので」もそれぞれ第31課で「～から」、第32課で「～ので」と別個に学習する。これにより1課あたりの学生の負担は軽減され結果的に類似文型との混乱は少なくなる。文型の提出順序も、より具体的で現実性のある文型から、前件と後件の成立条件の複雑な構文へとつなげていくようになっている。

以上述べてきた『別科・日本語Ⅰ』の特徴的な内容と構成のもたらす効用により、筆者の経験では中級学習に入る段階での、授業者・学習者の負担はほとんどないように思われる。本学では、中級学習の最初の授業で、文体について、「普通体」と「丁寧体」に関する説明、若干の演習をするだけで、文章読解の授業へと進められるからである。

### 3-2 日本語能力試験1級への影響

日本語能力試験1級は日本語学習時間900時間を基準として作成された試験である。近年は能力試験が私費外国人留学生の入試に課せられることへの妥当性など様々な疑問が持たれ、その準備期間も1年半は必要だというのが通説になっているようである。しかし本学別科では600時間ほどの限られた時間でかなり効果的な学習がなされている。

前出のように本学では中級教材の終了と同時に能力試験を意識した、文法中心の学習を2週間ほどやっている。網羅的に出題基準に則した練習問題をやるのだが、その際できるだけ中級で学習した文法事項と関連づけて教えるようにしている。ただし、この期間の学習はあくまでも理解のための学習で

あり、運用までもっていくのはその後上級の学習段階に入ってからである。結果として学習時間が短いにも関わらず5年間の能力試験の平均得点は各年度毎に約240点から280点を維持することができた。

例年実施していることだが、昨年度も日本語能力試験を目前にして学習者に初級、中級、能力試験準備に費やした時間について満足度を尋ねた。実際上級を学習する前に能力試験への対応を考えなければならない状況に筆者も矛盾を感じていたからである。しかし、彼らの大半は自分たちが経てきた学習に非常に肯定的で満足していた。試験は試験としてとらえ、総合的な日本語力をつけることを第一と考えてくれていたのである。

一夜漬けにも関わらず、基礎力、中級程度の読解力は充分身につけていた彼らは、受験者10名中6名が合格、全体の平均も277点と、充分満足できる結果であった。ただし、能力試験そのものが公正に行われていないということが公の席でも口にされることが多々あり、本学の学生もたまに驚くような明らかに本人の実力以上の点数を獲得する場合がある。またすでに1級程度の日本語力は持ちながら別科での学習を希望する学生もいる。そのためこのような場合の極端な高得点は上記の平均点には含めていない。

彼らの進学先は大半が国立大学であり、年度によって若干の違いはあるものの全体の30%ほどが本学学部への進学となっている。したがって学生自身の日本語学習に対する達成感も大切だが、日本語能力試験の成否も本学別科での彼らの日本語学習の成否を決める一つの条件にならざるをえないのが現実である。

#### 4. 初級授業実践例

次に実際の初級の授業例をとりあげこの教科書の利点を述べる。以下は筆者が行った昨年度の授業例である。例文等の表記は教科書は分かち書きを採用しているが、ここでは通常表記に変えてある。

1999年4月15日：授業開始より13時間目～16時間目（1時間は45分）

第3課「部屋に何がありますか」

##### 4-1 前日の既習事項の復習「文型3」：「～もあります。」

文型3 (1) A：図書館に英語の本がありますか。

B：はい、あります。

A：中国語の本もありますか。

B：はい、中国語の本もあります。いいえ、中国語の本はありません。

(2) A：あなたの部屋にテレビがありますか。

B：はい、あります。

A：ユンさんの部屋にもありますか。

B：はい、ユンさんの部屋にもあります。いいえ、ユンさんの部屋にはありません。

まず、現在の教師用机等にあるさまざまなものを取りあげ、「～の上に～がありますか。」等と問いかけ「～もあります。」や「～にもあります。」が定着しているかどうか確認する。全員を一巡したら眼前にないものに関する質問に切り替え理解度を確認する。「Aさん、あなたの部屋にテレビがありますか。」これも学生と教師だけの問答にならないよう、「Bさん、Aさんの部屋にテレビがありますか。」のパターンも取り入れ、次に学生同士で「あなたの部屋に～がありますか。」との問答を行う。

同様のパターンで「部屋に～があります」「部屋にも～があります」「～の部屋にはありません」の練習を行う。このように宮原（1994）が意図する学習者が理解しやすく覚えやすい、またできるだけ自然な形にパターン化されることによって、「～にも～があります」「～には～があります」も自然に身に付き、「りんごがあります。みかんもあります。」<sup>3)</sup>のような練習だけよりもはるかにいきいきとした言語活動に結びつく。

#### 4-2 当日の学習事項「文型4」：「何か」「何も」

文型4 (1) A：ひきだしの中に何かありますか。

B：はい、あります。

A：何がありますか。

B：葉書や封筒や鉛筆などがあります。

(2) A：ひきだしの中に何かありますか。

B：いいえ、ひきだしの中にはなにもありません。

「～の中/上/下に何かありますか。」「何がありますか。」との対比で学習者が混同しやすい「何か」と「何が」の違いが明白になりひとつの会話パター



ンでこの違いを理解し、身につけることができる。

これを別々の会話パターン「箱の中に何がありますか。」「箱の中にもりんごがあります。」「椅子と机の間に何がありますか。」「いいえ、何もありません。」「<sup>4)</sup>」や「部屋に何がありますか。」「何か飲みたいですね。」「<sup>5)</sup>」のような提示順序だと、どこかで教師側の文法的なまとめが必要になってくるのである。

文型4 (1)のパターンを練習した後で(2)「何も」を提示すれば全く無理なく「～には何もありません。」が身につく。

#### 4-3 当日の学習事項「文型5」：「～は～にあります。」

文型5 (1) A：教室にテープレコーダーがありますか。

B：はい、あります。

A：テープレコーダーはどこにありますか。

B：テープレコーダーは机の上にあります。

すでに外国で日本語を学んできた学生によく見られるのは「～に～があります。」「～は～にあります。」とまるで語順だけが問題であるかのようにこのパターンをとらえていることである。これで「が」と「は」の違いを理解したとするには不十分であり、このパターンに当てはまらない文を目にしたとき学習者はとまどってしまう。

この文型に関しては上記文型5 (1)にあるように最初の問答と2番目の問答を対比することによって「が」と「は」の働きを文法的説明なしに示している。口頭練習の場合もただ単に「～はどこにありますか。」「～は～にあります。」とオウム返しのような練習をするより、「は」と「が」に注意を払いながら語順にも気をつけることにより、複数の文法事項が身に付きそれが決して学習者の負担にはならず、かえって単調な言語活動が生き生きとした実感を伴った活動となる。

#### 4-4 当日の学習事項「文型6」：「～には～があります。」

文型6 (1) A：机の上に本があります。

机の下にはくずかごがあります。

A：ここに日本語の新聞があります。

あそこには英語の新聞があります。

(2) A：5階に田中先生の研究室と中山先生の研究室と田川先生

の研究室があります。

田中先生の研究室にはワープロがあります。

中山先生の研究室にはテレビがあります。

田川先生の研究室にはパソコンがあります。

このような配列により「に」と「には」の違いがわかりやすくなっている。これらの例文をよく読み、文例を教師がいくつか示すことにより簡単に「に」と「には」を対比する文を作り出すことができるようになる。

#### 4-5 当日の学習事項「注意1」「注意2」

この教科書の特徴的な欄の1つに「注意」の欄がある。別科での指導の経験から、学習者が作文などで誤用、混同しやすい文法事項を特に取り上げ、注意を喚起する欄である。第3版では22項目をあげた。ここはその最初の欄である。参考までに、教科書掲載の例文をそのまま以下に記す。

##### 注意1

1. これは ほんです。 あれは ほんではありません。
2. ここに ほんが あります。 あそこには ほんは ありません。

##### 注意2

1. ユンさんの へやには つくえや しょっきだなどが あります。  
つくえは まどの そばに あります。 しょっきだは ドアの そばに あります。
2. A: ユンさんの へやには なにが ありますか。  
 B: ユンさんの へやには つくえや しょっきだなどが あります。  
 A: つくえは どこに ありますか。  
 B: つくえは まどの そばに あります。  
 A: しょっきだは どこに ありますか。  
 B: しょっきだは ドアの そばに あります。

「注意1」では、否定の「～ではありません」と存在に関する「ありません」の違いの確認、「注意2」では「は」「が」の用法の例文によるまとめである。これらの「注意」は「文型」の授業では全員で音読したり、個別に音読させたりして、若干の説明を加えて再確認する。また「作文」の授業では学生の典型的な誤りを指摘する場合にしばしば参照させている。

#### 4-6 当日の学習事項「本文」

田中、ユン、チャンと3人の会話構成になっているのでロールプレイで本文を読ませ、内容について質問する。この際この課で習った文型、文法項目に特に注意し学習者の答えを引き出す。文型、文法の定着度を確認するにも最良の機会である。

場合によってはもう一度文型練習を行う。最後に全体でコーラス・リーディングを行い教科書を閉じさせ、再度簡単な内容理解に関する質問をして終わる

宮原(1989)が述べているように、本文は①学生の生活状況を反映させ、②できるだけ現実の会話に近づけ、③ストーリー性のある、④話し手の明らかな具体性のある会話文となっている。さらに⑤新しい文型、文法項目も自然なかたちで本文中に網羅してある、のが特徴である。

類似の教科書と比べて本文がかなり長い印象があるが、教科書上の現実味のない文章の繰り返しよりはるかに面白みがあり、短文を暗記するにしてもその状況がはっきりしている方が覚えやすいものである。

#### 4-7 当日の学習事項「読みと作文」

これは前述のとおり類似の教科書に例を見ないかなりの量の読解中心の文である。各課の最後にこれを読み、読解に関する質問を行う。時間が許せば助詞や動詞の活用形などを適当に抜いた「読みと作文」のプリントを与え、読ませたり、書かせたりする。読解に関する質問への答えもプリントに書かせると口頭練習では見のがしていたミスが発見できることもよくある。また繰り返し読むことで、ほとんど諳んじることができるようになるほどにこの文に親しむ学生もいる。

課ごとにこの読解文に触れることにより、複雑な構文を含む文の読解練習ができるだけでなく、ある程度自然に近い早さで音読する訓練もできるため、この欄のもたらす学習効果は大である。

最後に「新しいことば」をアクセント符号に注意しながら音読し、「練習」を宿題として与える。

以上が昨年度行った実際の授業のひとこまであり、担当者は変わっても別科の「文型」の授業は大まかにはこのペースで実施されている。

## 5. 学習者の立場から

昨年度の学生の構成は中国9名、ロシア1名の計10名であった。うち既習者（上級に近いと見られるもの2名）、若干の知識が来日以前からあったもの1名であった。残りの7名は初習者でありうち1名は授業開始から60時間後にやっと来日した。彼女はひらがなさえ書けない全くの白紙の状態で来日し本人はもとより授業担当者も一時は途方に暮れた。しかし、徹底した教科書の復習、放課後の課外授業（約45時間）で1ヶ月後には他の級友と同等に授業に参加できるようになった。

本人の努力はもちろん、文法書さえ持たずに来日した初習者が基本文型、文法事項を身につけ、後述のような作文（学生作文a）を1ヶ月ほどの学習の後書けるようになったことについては、学習者の立場に立った教科書の果たした役割は大きいと考える。というのは彼女の生き生きとした自己表現に満ちた作文のほとんどは教科書の例文を借用または応用したものであるからだ。彼女は12月の日本語能力試験一級を受験し、300点以上の高得点を獲得した。

学部進学後も長崎が第二の故郷ようになった修了生は機会あるごとに「帰省」してくれるが、そのときに口にするのが、彼らが1年間学んだ日本語の確かさであり、初級テキスト『別科・日本語I』の教材としての充実度である。本学学部進学者も大半が学部留学生の牽引力となってくれているのはありがたい。しかも学部における日本語の授業もただ単位を修得するためのものではなくさらに日本語を磨くためという意識をこの1年間で育んでくれるのもうれしいことである。

以下の学生が授業で書いた作文を参考例としたい。作文の授業では1週間に1つの課題を提出することになっている。初級の段階、中級の段階、上級の段階と各段階における学習者の達成感が伝わってくる文ではないだろうか。

### 作文 a                      わたしのきぼう

（中国人女子学生、日本語学習期間1か月）

わたしはきぼうがたくさんあります。

わたしは日本語が早くじょうずになりたいです。日本にきて、別科日本語研修課程にはいって、すぐ、じゅぎょうでつかうことばがぜんぶ日本語なのを見つけました。びっくりしました。それに友だちはわたしよりじょうずなのです。わたしはぜんぜんわかりませんし話せません。わたしはふあんにな

りました。いま、長崎にきて、もう1か月たちました。日本語がへたです。かんたんなあいさつしかできません。私は日本語を話せたいです。先輩の話によると12月の統一試験はとてもむずかしいそうです。もっとよくべんきょうします。

私は英語もじょうずになりたいです。国で学校では英語をならいました。でも、いま、英語のぶんぼうやことばができないようになりました。大学の入学試験はえいごも入れるそうです。私はとても心配になりました。

私はなつ休みにはアルバイトがしたいです。日本は物価がたかくて、こまっています。

私はしょうらいきれいな家をたてたいと思っています。わたしのきぼうはけんこうにたのしく気持ちよく生活することです。また、私はおんがくがすきです。1度ギターをならったことがありますできません。しょうらい音楽についてならいたいと思っています。(原文通り、初稿)

## 作文 b 夏休みの計画

(中国人女子学生、日本語学習期間3か月)

あと2週間で夏休みになります。それで、私はいろいろな計画をたてました。

まず、試験がおわてから、すぐ友達と網場の海の辺ではなびをしようと思っています。あと、外泊をして〇〇さんのうちに2日間とまるつもりです。

寮に帰ってから、夏休みの勉強がはじまります。せんぱいの話によると、長崎の夏はとても暑いそうです。ですから、私は図書館で勉強するつもりです。ゆうがたになたら、寮に帰って、料理を食べて、ひとりでへやで絵をかこうと思っています。

私は来年芸術大学に入るつもりです。先生の話によると、福岡は絵に関係のある所があるそうです。ですから、私は夏休みに福岡へ行ってみたいです。しかし、どうやてひとりで行くことにこまっています。ですから、別科の〇〇さんといっしょに行きたいです。福岡へ行っているいろいろな芸術に関係のある情報を探して、学ぼうと思っています。また福岡の本やさんへ行って、いい本を買おうと思っています。

今年の夏休みはとてもいそがしいと思います。でも、楽しみにしています。

(原文通り、初稿)

**作文 c**                    **私と日本語**

(中国人男子学生、日本語学習期間7か月)

私は日本に来る前、日本語は50音図だけ勉強しました。中国では先生に習ったことがなかったので、50音図でも発音を間違ってしまったところがあります。私は「なにぬねの」と「らりるれろ」の発音が同じになりました。

日本に来てからよくほかの別科生に笑われていました。私もとても困りました。先生はいつも私の発音を直しましたが、間違った発音がかせになったのでなかなか上達できませんでした。

日本語はほんとうに難しいです。

(中略)

日本に来てから、先生は熱心に私たちに日本語を教えてくださいました。私はこの7か月一生懸命勉強しました。今は日本語を勉強するのはおもしろいと思います。

以前は日本語が全然話せなくて毎日生活はとても大変でした。だんだん先生や友だちと日本語で話せるようになりました。日本の新聞を読んでも内容がだいたいわかるようになりました。日本語の勉強を続ける自信もつきました。日本語がすきになりました。

日本の社会について広く深く知るために、私はこれからもずっと一生懸命日本語を勉強しようと思っています。(原文通り、初稿)

**作文 d**                    **別科の思いで**

(中国人男子学生、日本語学習期間10か月)

私は昨年4月に日本の長崎にきました。現在までまもなく1年間たちました。この1年間の生活を振り返って収穫がとても大きいと思いました。

(中略)

国内の大学で日本語を2年間勉強しました。でも日本語はかなりへたでした。この1年間で日本語は随分大きな進歩を収めました。日本語能力の1級の試験も合格しました。それで私は自分に「これはどうして」とよく質問しました。別科ではいつも夜遅くまで勉強しました。別科の生活は大変でしたが、別科では日本語だけでなく人生の勉強もしました。この1年間の生活は私の意志をきたえました。

私は3月に別科を修了します。まもなく大学の生活を迎えます。人生道路

にはまだ多くの困難がありますが、別科で一生懸命勉強したことを忘れないで根気さえあればきつとうち勝てると思います。(原文通り、初稿)

## 6. おわりに

以上本学別科で使用している『別科・日本語Ⅰ』の特性について述べてきたが、筆者は初級教科書については今後も以下のような機能を追求していきたいと考えている。

一般に初級段階では話し言葉の習得が中心とされているが、学習者が今後長期にわたって日本に滞在し、アカデミックな生活を送っていくことが明白な本学の場合、第一に「読み、書き、話し、聞く」の4技能をできるだけ早期にバランスよく養成できるよう配慮した教科書が必要である。第二には学習者の学習意欲をできるだけ長期間維持させるためにも、単文の発話指導だけでなく、会話の流れを意識し発話力の養成を意図した教科書、第三には学生の生活に身近で現実性のある例文を提示する事により、比較的容易に自己表現にむすびつけられる教科書が必要である。第四に最も大切なことだが、文法書や媒介語に頼らず学習者自身が予習・復習の段階で重要な文法項目を理解できる構成で、学習者の誤用・混乱を未然に防ぐ配慮のある、学習者の立場に立った教科書の必要性を痛感している。

これら4項目について、本学別科では今後も授業者の経験や工夫を蓄積させ、さらに充実した『別科・日本語Ⅰ』の作成へと結びつけていくつもりである。

## 資料(1)

## 長崎総合科学大学別科日本語研修課程教育課程表

科目	必修選択の別	単 位	週当たり授業時間	
			前 期	後 期
文 型	必 修	20	20	20
作 文	必 修	2	2	2
会 話	必 修	2	2	2
発音・表記	必 修	1.5	(4)	
自然科学基礎用語	必 修	0.5	(2)	
数 学A	必 修	2	(4)	(4)
体 育	必 修	2	2	2
漢 字A	} 選択必修	2	2	2
漢 字B				
英 語A	} 選択必修	2	2	2
英 語B				
数 学B	選 択	1		(4)
物 理	選 択	1.5	(2)	(2)
化 学	選 択	1.5	(2)	(2)
世 界 史	選 択	3	(4)	(4)

(注) ( ) は全期間でないことを示す。



資料 (2)

### 1999年度別科時間割

1999年4月5日～6月18日

時 間 \ 曜 日		曜 日				
		月	火	水	木	金
1	8:50 10:20	文 型	文 型	文 型	文 型	文 型
	10:30 12:00					
3	13:00 14:30	文 型 [テスト]	英語 A 英語 B	自然科学 基礎用語	体 育	漢 字 A
4	14:40 16:10	作 文	漢字 B 文型 再テスト	会 話	発 音 記 表	発 音 記 表

1999年6月21日～1月28日

時 間 \ 曜 日		曜 日				
		月	火	水	木	金
1	8:50 10:20	文 型	文 型	文 型	文 型	文 型
	10:30 12:00					
3	13:00 14:30	文 型 [テスト]	英語 A 英語 B	数学 A, B	体 育	数学 A, B
4	14:40 16:10	作 文	化 学 世界史	会 話	漢字 A 漢字 B	物 理 世界史

## 注

- (1) 1999年度長崎総合科学大学別科日本語研修課程修学規程による。
- (2) 佐々木仁子・松本紀子『日本語総まとめ問題集』アスク講談社、白寄まゆみ・入内島一美『日本語能力試対応文法問題集』桐原ユニなども一部利用している。
- (3) 例文は『初級・日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター、6か「ぶんけい」による。
- (4) 同上
- (5) 例文は『しんにほんごのきそⅠ』スリーエーネットワーク、第10課および第13課の「例文」による。

## 参考文献

- (1) 鈴木義昭（1990）「条件句の日中対照ーば・たら・なら・とをめぐってー」『早稲田大学日本語教育センター紀要2』
- (2) 高木きよ子（1980）「中・上級の読解教育」『中・上級の教授法』国立国語研究所
- (3) 北條淳子（1998）「日本語教育における名詞句・連体修飾節」『講座日本語教育』第33分冊 早稲田大学日本語教育センター
- (4) 宮原 彬（1983）「別科日本語教育ノートー文型練習の方法についてー」『長崎総合科学大学紀要』第24巻第2号
- (5) ———（1989）「別科生用初級教科書『別科・日本語Ⅰ』についてーその作成の意図と構成」『長崎総合科学大学紀要』第30巻第2号
- (6) ———（1994）「初級文型の導入のあり方についてー学習者にとっての教科書の文例ー」『長崎大学外国人留学生指導センター年報』第2号研究論文編

（留学生センター非常勤講師、長崎総合科学大学別科日本語研修課程講師）